

か

と頭をそむけて行き過ぎてしまわれました、そをこ
をして居る内に漸く姉に聞たお婆さんの住家まで
来ました。時にお婆さんは前と同様に窓から顔を
出して居ましたから墨子は之れが姉様に聞たお婆
様だと気がついて其の前に進み寄つて少しも恐れ
ずに當分妾しを使ふて下さいと請ふて之の家へ住
みこみました。

翌日は勞かれて居るにもかゝらず太陽の出ない
中から起きて一生懸命で働きました。此れは自分
も姉様と同じ様に澤山の金貨を得ようと思ふので
いや／＼ながら務めたのでした、然しそれも永く
は續かず二日目にはそろ／＼惰け出しまして三日
目には太陽が窓を照しても起き様とせずお婆に
起されて無性々々に起きました、四日五日と日を
経る度に本性を表して來ましたからお婆様もあざ
れて七日目には暇をやると云ひ出しました。然し
墨子は大變嬉んで姉様と同じ様に金貨や衣服がも

らへると思つて居りました、所がお婆様は大きな
コルタの箱を持つて來て墨子の頭から浴せかけ
まして、

四十四

「之れがお前が七日働た報酬です」

と云ふて消えてしまいました。そこで墨子は泣く
泣く家へ歸つて來ましたが、たゞでさい黒い墨子
はコルタの爲めに印度の黒奴の様になつてしま
いましたので近所の村人に誰れ一人墨子をお嫁に
と云ふ者がありませんでしたが、姉の雪子の方は
村の中に大評判となりまして方々からお嫁に下さ
いと云ふ人が澤山ある様になりました。

金魚のお話

會員 よ し 子

ある處に太郎と云ふ可愛らしいすなはな子供がわ
りました。毎日幼稚園に通つて居りましたが大變

えらい子供で、雨が降つても風が吹いても、暑くても寒くてもまだ一日もおやすみしたことはございませぬ。

ある夏の日の事、太郎は今しも幼稚園から歸つて来て

太郎「母様、只今！」

とお辭儀を済して、暑さに上氣した顔のはこりを涼風に吹かせ様と思つてお椽側に出て來ました。暫く涼んで居る中にそこら見廻はすと、先づ目に

ついたのはそこにあつた大きな水鉢です。是は太郎の大好きな金魚鉢なので。此間お父様が太郎に買つて下さつたのです。太郎は何の氣なしに鉢の中を見ると丸つ子や三つ尾の美しいのが、然も涼しそうに泳いで居ますから、急に水を思ひ出して、太郎「金魚は嘘ぞ心持がよいだらうなア、僕も金魚の様に始終裸かで居たいなア、着物なんか暑くて仕方がないやア」獨り言を云ひますと一番大きな三つ尾の赤がズット水の上に浮いて來て大きな

口を出して、

金魚「坊ちゃん、私供は決して裸かなぞになりはしませんよ、始終着物を着て居ますよ」と不意に話し掛けたので太郎は吃驚して飛び上りました。そして

太郎「ア、吃驚した。何んだつて、いきなりそんな大きな聲を出すんだね。お前着物を着て居るつて？ 何んな着物さ、着物なんぞありやアしないぢやないか？」と云ひますと

金魚「坊ちゃん、私の着物が見えませんか、是れ此通り、鱗と云ふ美麗な着物があるぢやありませんか」

太郎「成る程そうか」と云ひながら能く金魚の顔を見ると耳がありませんから、太郎は不思議に思ひまして

太郎「オイ金魚さん、君には耳がないね、それで能く聞えるね」

金魚「じやうだん云つてはいけませんよ坊ちゃん、

有りますともね、能く見て下さい。小さい穴があるでせう、それが私の耳ですよ」と云ひますので能く見ますと

太郎「ア、在つた〜、口の直ぐ上の處に、けれど可笑しいな、君の耳は口の上にあるのだね」

金魚「坊ちゃん、困りますね、そんな探し方では、口の上に耳なんぞがあるものですか、それは矢張り鼻の穴ですよ。そして耳の穴はもつと上の方にありますよ。能く見て下さい。」

太郎「モット上の方？、ア、なる程わつた〜、あんまり小さいので解らなかつた。是が耳かね！成る程小さな穴だなア、」

金魚「小さくつたつて聞くに違ひはありませんからネー、坊ちゃんの様につんばの早耳などはしませんよ」

太郎「是は失敬な事を云ふ、何時僕がつんばの早耳をしたえ」と怒り掛けましたので金魚は早速閉口して

金魚「是はドウモ失禮致しました、御免下さい、時に坊ちゃん、此間の遠足は面白う御座いましたか今度行らしたたら亦棒振の御土産澤山御願ひ致します、」

太郎「ア、亦取つて来て遣らうね、お前棒振大變好きだね」

金魚「エ、何より結構ですもの、それに此間の様な赤のなどは尙更甘いですからね、」

此時太郎は金魚の尾のフワ〜と動ひて居る處を見て居ましたがフト金魚の足のないのに氣が着いて

太郎「ア、ラ、可笑しいな、金魚には足がないよ、蛙だつて足があるのに金魚にはないよ、お前ソレデ能く歩くけるねー」

金魚「ソレハ貴君、私には蛙の様な足はありませんさ、けれど蛙の足よりも、坊ちゃんの足よりも丈夫な、そして水の中では都合のよい足を持つて居ますよ、是れ御覽なさい、此美麗な尾を、然も三

つありますよ、坊ちやんよりも一つ多いでせう、蛙に比べても多いでせう、夫れに此尾の都合のいゝことは是で水をかくと何方へでも自由に早く曲れますからねー、何があつたつても突かる様な煩間なことはしませんよ、蛙なぞ御覽なさい、こんな水鉢などへ入れると始終突かつてばかり居ますよ。

太郎「成る程夫れはそーだね、夫れにしてはお前は能く轉んだり、ひつくり返つたりしないね」、金魚「ソレハ貴君私の背中と腹とにひれと云ふものがありませんか、是れがありますから倒れないのです。」

太郎「ソーかね、中々甘く出来てゐるね」と云ふトタンに水鉢の椽に突いて居た太郎の手がボンと端れて椽側へドンと落ちたので金魚は吃驚仰天、ピンヤと波を打たせて鉢の底へ沈んで行きました。暫くして居る中に水が静かになつたので三つ尾は亦上の方へ浮いて來ました。

太郎「金魚君、何をそんなに驚くんだよ、僕が一寸手を落したただけなのに？」

金魚「ア、吃驚しました。私は又大地震でも起つたのかと思ひましたので驚いて沈んだのです」、太郎「金魚君、君は水の底にくいるのが上手だね、そして何時迄も沈んで居られる様だね。」

金魚「ソレデス、私は何時迄も沈んで居られますよ、そして底の處を方々自由に泳いで歩けますよ、蛙などにはこんなことは出来ませんからね。」

太郎「何うして、そんなに勝手に沈んだり、浮いたりすることが出来るんだねー、僕にも教へて呉れないか」

金魚「ソレハ教へて上げたいのは山々ですがね、此ればかりは教へられないのです、何故と云ふに私は善いものを持つて居るんですもの」

太郎「ソレ何さ、僕にも呉れないか」
金魚「ソレデスネ、折角ですが是ばかりは上げられませんよ、ソレデモ私のお腹の中にあるんですも」

の上げ様ものなら私は死んでしまえますからね、ソレハネ、浮き袋といつて空氣の入つた大きな袋です、そして此袋を大きく膨らますと上に浮くことが出来、小さく縮めると沈むことが出来るのです、是れは私の生れた時から神様が付けて下さつたので唯つた一つきりしかないのです。

太郎「ソレハ善いものを持つて居るのだね、僕もそれを欲しいな。其浮き袋と尾と鰭とあれば僕も金魚の様に水の中が泳げるんだね。」

金魚「イーエ、ソーは行きません、まだ、も一つ足りないものがありますよ、あなたはまだ御存じないかも知れませんがね、あなたは始終呼吸をなさるでせう、水の中でソレが出来ますか」と云はれて太郎は閉口して

太郎「成る程、是は困つたね水の中では、呼吸が出来ないや、呼吸をしなければ死んでしまふは……ア、いーな君は呼吸をしないで生きて居れるんだね。」

金魚「イーエ、そんな事はわりませぬよ。私だつて生きて居ますもの、矢張り始終呼吸をして居ますよ。」

太郎「ア、ソーカ、それぢや、判つた、時々水の上に口を出してアツプ〜するのはアレ呼吸して居るのだね。」

金「イーエ、ソーでもないのです、私は別に水の中で呼吸の出来るものを持つて居るのですよ。ソレハネ、私の鰾の處にエラと云ふ櫛の様なものがあるでせう、此が在れば水の中で呼吸が出来ますが是がないものは駄目です、ナント善いものを持つて居るでせう、」

と金魚は高くもない鼻の穴をビョコつかせて高慢話を致しました。此時丁度お父様のお歸りと見えて玄關でお父様の笑聲がしましたので太郎は勢ひよく起ち上つたので水鉢が揺れて水が波立ち金魚は驚いて水の底に沈んで行きました。